9　まとめとして

アメリカの海洋生物学者レイチェル・カーソンは、その著書「センス・オブ・ワンダー」の中で、「子どもたちにとって最も大切なことは“知ることではなく感じることだ”」と言っています。環境学習でも、このことは本当に大切なことなのです。

伝えたいことがあるとき、理屈よりも心に響く「何か」が必要です。しかし、その「何か」を感じとる感性が無いと伝わりません。それでは、その感性は、いつどこで育つのでしょうか。

環境学習の基礎、つまり、「環境学習の入り口の部分」では、感性を育てることが大切です。幼稚園から小学校低学年までの子どもたちへの環境学習は、このことを考慮しながら行なう必要があります。

例えば、子どもたちへの環境学習に、絵本を活用してみてはどうでしょうか。最近の絵本の中には、環境学習の題材として適したものが多くあります。絵本を活用しながら、子どもたちに心を開いてもらい、自分の気持ちや自分の心を開いて素直に話してもらえる雰囲気をつくります。子どもたちは、心を開いて素直に話すことにより、いろいろなことに自然と気づいていきます。気づき感じることは行動の原点になりますが、このことは、大人でも言えることではないのでしょうか。このように、感性を育てるための環境学習も大切なことだと思います。

環境学習は、一生終わることはありません。プログラムは、それぞれの世代に対応した内容がありますが、その基本的事項は共通しており、それらを認識したうえで、プログラムを作成したり、実践することが必要です。

こどもたちへの一番大切な贈り物は
美しいもの、未知なもの、神秘的なものに
目をみはる感性「センス・オブ・ワンダー」です。
その感性を育むために、子どもたちと一緒に
感覚のすべてをかたむけて
自然とふれあいましょう。

レイチェル・カーソン著
「センス・オブ・ワンダー」より